児童・生徒の「生活実践力」はどう変わったのか
―東北地方における調査をもとに―

渡瀬　典子*・長澤　由喜子*
（2014年２月12日受理）

Noriko WATASE, Yukiko NAGASAWA

How have the Status of Elementary School and High School Students' Life Practice Changed?
— Based on a Survey in the Tohoku District —

Ⅰ．はじめに

児童・生徒のライフスタイルは，家庭内外における「人」との関わり，生活の中にある「もの」との付き合い方をはじめ，様々な事象に影響を与え／与えられ形成される。児童・生徒の生活に必要な技術・技能の定着，生活体験不足への対応は家庭科教育の実践で課題とされてきた。学校で学んだ「科学概念」と日常生活における「生活概念」をどう結び，生活実践化を促すか，そのために，児童・生徒の現実の生活状況を知り，そこから実践を組み立てることも重要な課題といえる。「生活実践」とは，「人，道具や材料との関係からなる複雑な生活行為の複合[1)]」のことをいい，本研究では，これらの関係性の中で，児童・生徒が自らの生活をよりよくしようとする取り組みを「生活実践力」と捉える。

そこで，およそ四半世紀前の児童・生徒の状況との比較から，家庭科教育の中で取り扱われる学習内容について現在の児童・生徒がどのような認識を持ち，生活実践しているかに注目した。検討にあたり，過去の児童・生徒の家庭生活及び生活実践状況と比較するため，日本家庭科教育学会東北支部会が1985（昭和60）年に東北６県の小･中･高等学校で実施した「家庭生活に関する認識調査（以下，85年調査と記す）」結果[2)]を用いる。85年当時，既に児童・生徒の「基礎的な生活自立能力のレベルダウン[3)]」とその事態への対応，生活実践力育成の必要性が指摘された。それから約30年経過した現在において，どのような点で児童・生徒の「生活実践力」に変化が見られるか／見られないか，を検証することは重要と言える。これまで，「住生活改善意識」について比較した結果，現代の児童･生徒は住まいに「リラックス」する空間を求め，間取りにおいて「勝手口」がないことが当たり前となっていることが明らかになった[4)]。そこで，本研究は主に家庭生活，衣生活，食生活における状況について見ていく。

また，過去と現在の比較という「時間軸」のほかに，現状における「時間軸」，すなわち学校段階や学年の違いによる生活実践状況について注目する。例えば，2001（平成13）年に日本家庭科教育学会が実施した「家庭生活についての（全国）調査」では，学年進行に伴い，生活実践が「増えるもの（季節に合う服装を自分で決める，洗濯機で衣服の洗濯をする）」，「あまり変化しないもの（包丁で食べ物を切る）」，「減少するもの（洗濯ものをたたむ，家族の夕食を作る）」があった[5)]。

＊岩手大学　教育学部

また，「85年調査」では，生活実践状況の男女差が明確に現れたことも指摘されており，生活実践における性差が現状ではどのような状況か検討する。

Ⅱ．研究方法

検討にあたり，東北６県の小・中・高校生を対象とする「家庭生活に関する認識調査」（日本家庭科教育学会東北支部会1985）結果を用いる。調査方法は，質問紙による自記式留置調査であり，有効回答数は小学校４年生555人，小学校６年生534人，中学校２年生570人，高校２年生594人，計2,253人だった。

この「85年調査」の質問紙を抜粋し，85年の調査方法と同様の方法で質問紙調査を実施した。調査対象は，「85年調査」において岩手県で調査対象校とされた小・中・高等学校にほぼ準じる学校，各１校から回答を得た（小学校４年生104人，小学校６年生109人，中学校２年生152人，高校２年生154人，計519人）。調査時期は2009（平成21）年１月末～２月上旬である。

Ⅲ．結果と考察

１．調査対象者の家族との関わり

児童・生徒の家庭の状況について見ると，85年調査では拡大家族29.9％，核家族69.3％，09年調査では拡大家族24.5％，核家族75.5％で双方ともに家族形態は核家族が多かった。また，同居家族数はいずれの学校段階でも「４人」が最も多かった。「家族の誕生日に家の人がそろって食事をしたり，お祝いの集まりをしますか」という問いには，「いつもしている」，「することが多い」が男子７割，女子８割，全体で75.3％だった。85年は57.3％だったことから，家族が子どもの誕生日を祝う家庭が増えている。一方，「しない理由」をみると，09年調査では，「家の人が忙しい」，「家族に用がある」が３割程度を占めたが，85年は中２，高２で「習慣がない」が最も多い理由で，それぞれ31.2％（中２），32.3％（高２）だった。09年調査では，「習慣がない」の回答は8.9％（最も多かった高２で12.8％）で，85年調査より著しく減少した点に違いが見られる。

次に，「家の人にあなたは毎朝あいさつをしますか」の設問では，85年調査と比べ，あいさつをする子どもの割合は増加している（50.8％→57.9％）。また，いずれの調査でも小学校４年生が家族に朝のあいさつを最もしていた（09年：71.2％）。85年調査では，「学年が進むにつれて，あいさつしなくなり，とくに小学生と中学生の間で『しない』ギャップが大きい」という結果だったが，09年調査では小６と中２で10ポイントの差はあるものの，小４と小６との間にも10ポイント近くの差が存在している。しかしながら，85年調査では中２で43.5％（09年：52.6％），高２で35.0％（09年：51.3％）だったことから，85年の時よりも学校段階差は縮小傾向にある。「あいさつをしない理由」を見ると，「なんとなく」が最も多く４割を占め，小６，中２では半数以上だった。次いで「する習慣がない」という理由が多く，とくに高２でこの回答が多かったことから，家庭内で朝のあいさつを「何となく」しない状態から，しないことが当たり前になっていく状況がうかがわれる。

２．食生活における状況

「85年調査」では，「夕食時にだいたい（家族が）そろう」という回答が46.1％（全体平均）と半数に近かったが，09年調査では，37.0％と10ポイントも低下し，個食化が進行していた。家族が揃わない主な理由は，いずれの学校段階でも「父の帰りが遅い」が最も多い。中２，高２になると「自分の都合による（たとえばクラブ活動，塾など）」という回答が1/4を占めた。また，「家の人の都合であなたが急に自分の夕食を用意しなければならなくなったとき，どうしますか。」という質問に対し，「家の中にあるものを選んで食べる」という回答が85年調査よりも10ポイント近く上昇し，全体で４割の回答を占めた。85年調査で最も回答が多かった「自分でつくる（46.7％）」は09

年で33.6％になり，10ポイント以上回答が減少した。その要因として，簡単に食べられる食品の増加やこれらを買い置きしておくライフスタイルの変化が背景にあるかもしれない。また，女子の回答割合が著しく低下し（56.8％→36.4％），男子も「自分でつくる」の回答割合は減っている（36.8％→30.9％）。但し，「自分でつくる」という回答は学年進行とともに微増傾向にある。

それでは，実際に児童・生徒はどのような料理を作ることができると認識しているのだろうか。

85年当時の家庭科及び技術・家庭科の学習指導要領を見ると，「小学校：野菜の生食，ゆで卵，緑黄色野菜の油いため，簡単な間食（５年生），米飯，みそ汁，卵料理，じゃがいも料理，サンドイッチ，飲み物（６年生）[6]」，「中学校：米飯，みそを用いた汁もの，ルーを用いた汁物，魚や肉の油焼き，卵焼き，野菜・果物を用いた炒め物，サラダ（食物１），すし飯，澄まし汁，乾麺を用いた料理，ひき肉を用いた調理，野菜を用いた煮物・揚げ物，小麦粉を用いた菓子，寒天を用いた寄せ物（食物２），味付け飯，くず汁，魚の煮物・直火焼き，卵を用いた蒸し物，酢の物，あえ物，小麦粉，卵を用いた天火焼き（食物３）[7]」，「高等学校（家庭一般）：献立による調理，幼児や老人を含む家族の日常食，行事食を生徒や地域の実態を考慮して実習する[8]」と多岐にわたる調理実習題材が示されており，現在の学習指導要領の内容と比べて，かなり多くの料理名が挙げられている。

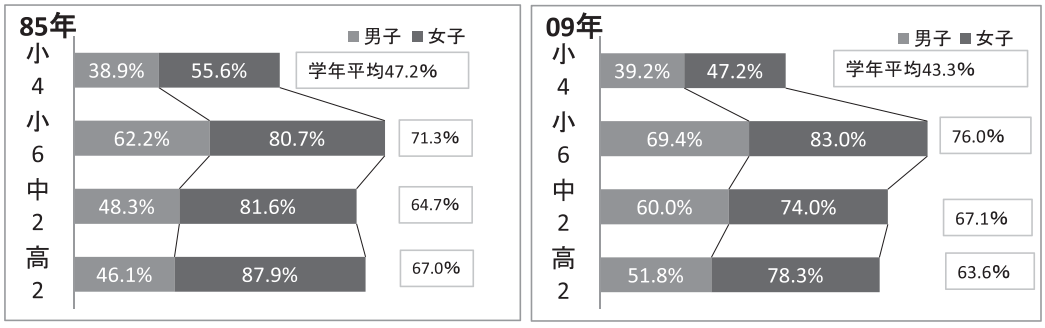
「85年調査」では，主に小・中の調理実習でとりあげられる12品目を提示し，「作ることができる料理」を質問したところ，ほぼ学年進行に伴い，「作ることができる」割合が高まるという結果だったが，09年調査では，学年進行と「作ることができる」ことは必ずしも比例せず，また85年調査と比べて，「作ることができる」の回答率は低下傾向にある（表１）。

表１　「作ることができる料理」の上位５位（全体）

85年調査	09年調査
インスタントもの（92.6%）	インスタントもの（86.8%）↘
卵焼き（89.6%）	卵焼き（79.4%）↘
サンドイッチ（77.2%）	米をといでご飯を炊く（78.5%）↗
米をといでご飯を炊く（69.0%）	野菜サラダ（71.7%）↗
野菜サラダ（68.6%）	サンドイッチ（71.1%）↘

注）選択肢に挙げた12品目は以下のとおりである。
「米をといでご飯をたく、みそ汁、カレーライス、卵をフライパンで焼く、野菜サラダ、焼き肉、サンドウィッチ、ハンバーグ、野菜いため、焼き魚、チャーハン、インスタントもの」

09年調査で85年調査の結果を５ポイント以上上回ったのは，「米をといでごはんを炊く（小４，６，高２）」，「みそ汁（小６）」，「野菜サラダ（小６）」，「焼き肉（小６）」，「ハンバーグ（小４，６）」，「野菜いため（小６）」，「焼き魚（小６）」である。とくに，小６の「野菜いため」，「野菜サラダ」，「炊飯」など現在も家庭科の調理実習で取り上げられる料理の回答割合が高まったのは，家庭科学習の成果かもしれない。一方，「サンドイッチ」は85年調査で小６の９割が調理できると回答しているが，09年調査では10ポイント落ち、全体でも「できる」という回答は減っている。この結果は，当時の小学校家庭科教育の影響（題材指定等）が推察される。



（$p<0.001$）

図１　作ることができる料理（みそ汁）

男女差をみると，85年，09年ともにほぼ全ての料理について女子の方が「料理できる」という回答が多かったが（$p<0.001$），85年よりも09年の方が男女差が縮まっている。とくに,「みそ汁（女子「できる」－男子「できる」）85年：27.9％→09年：16.1％」,「ハンバーグ21.9％→9.3％」,「焼き魚14.5％→2.5％」,「チャーハン21.4％→11.7％」が顕著であり，これは男子が「料理できる」と回答した割合が高まったことも一要因である（「チャーハン」を除く）。その反面, 女子が「料理できる」と回答した割合が低下したことがこの結果を導いており，男子の調理技能があがったから，と一概には喜べない結果となった（図１）。

３．衣生活における状況

「自分」で服を選ぶという回答が学年進行とともに高まることは，85年調査も09年調査も同じ傾向が認められた。しかし，85年調査では服を選ぶ人が「自分と母（42.8％）」,「自分（36.8％）」という順だったが，09年では「自分（50.0％）」,「自分と母（31.6％）」と順位が逆転している。例えば09年の調査結果では，小６女子の半分近くが「自分」で服を選ぶと回答し，85年では６割程度だった高２女子では７割強が「自分」で選ぶと回答した。85年調査では高２女子の２割は「自分と友達」が服を選ぶとしていたが，09年調査では皆無であり（高２男子も12.5％→1.2％）,「服を選ぶ」ことは個人的な生活行為になっていることが推察される。

次に，購入した服の「洗濯」の実施状況について，家族の洗濯物と自分のものを分けるかどうかに注目した。思春期になると，“自分の洗濯物は家族のものと一緒に洗ってほしくない（洗いたくない）”と言う生徒がいるというが，調査結果ではそのような状況が表れているのだろうか。「自分のものを洗うとき，家族のものもいっしょに洗たく機に入れて洗う」という質問について，85年調査をみると，「よくする」の回答割合は男子14.4％，女子29.1％だが，その内訳をみると高２女子で回答率が低下する。ところが，09年の調査結果をみると，「よくする」という回答割合は男子28.6％，女子44.7％と大幅に増えており，高２女子の回答は53.6％と最も多い。ところが，09年調査では，中２女子で「しない」割合が45.5％と多く，男子も中２で「しない」という回答が多くなり，85年調査の高２女子の結果が中２におりた結果となった。

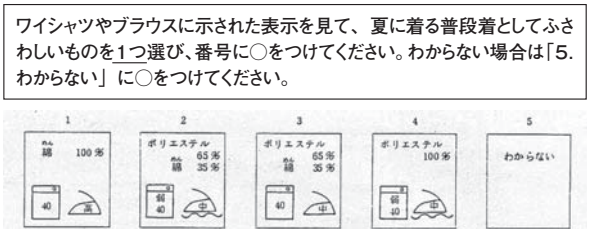


図２　取り扱い絵表示の読み取り

３．取り扱い絵表示の読み取り

小学校から高等学校の衣生活分野の学習では，衣服の適切な手入れのために取り扱い絵表示を読み取る学習をする。図２に示すように,「ワイシャツやブラウスに示された表示を見て，夏に着る普段着としてふさわしいもの」を選ぶ設問となっている。判断基準として被服材料の組成と洗濯の際の手入れのしやすさが挙げられるが，85年調査では「１」もしくは「３」を正解としている。「１」と「３」の選択状況は図３に示す状況だった。85年では「１」35.1％,「３」15.2％という選択率である。85年調査では,「女子が学年進行とともに正答率が高まる半面，男子は正答の回答率が減少したり,『わからない』の割合が増加するなど矛盾した結果が表れている」という調査結果の総括がある[9)]。09年調査では,「１」21.1％,「３」15.2％で,「１」を選択する割合が10ポイント以上減少し，男女ともに「１」を選ぶ割合が少なかった。また, 綿とポリエステルの混紡である「３」の選択率は，小６女子で多い半面，他の学年では回答率が少なかった。既製品では「３」の組成のものが多く見られることから，日常生活で取り扱い絵表示を見る機会が少ないことが推察される。

図４は「わからない」の回答状況である。09年

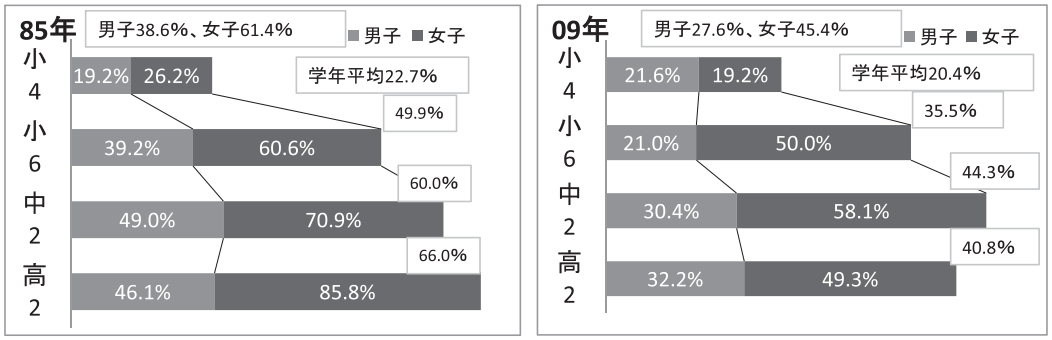


図３　取り扱い絵表示の読み取り（「1」，「3」選択）

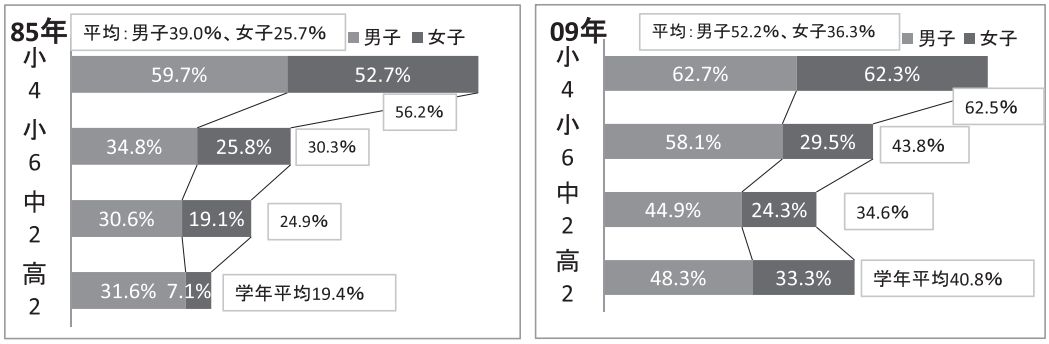


図４　取り扱い絵表示の読み取り（「わからない」を選択）

調査では「５．わからない」の回答が男女ともに増加し（85年男子39.0％，女子25.7％→09年男子52.3％，女子36.3％），様々な条件から答えを導き出す設問への対応が不得手，という状況がうかがわれる。その一方で，汗をよく吸う吸湿素材は綿，羊毛，レーヨンで，ポリエステルなどの合成繊維は吸湿性に劣る，という繊維本来の性能から，性能改善が進み，合成繊維でも吸湿性が改善され，吸水・速乾素材が開発されるなど，被服製品の革新から「わからない」という回答が増えたことが背景にあるかもしれない（それでも，アイロンの際に当て布を要する２と４が妥当とは考えにくい）。

Ⅳ．まとめ

およそ四半世紀の間、児童・生徒をめぐるライフスタイルは，様々な製品の登場・進化，家族員の働き方の多様化，家庭における生活時間配分の変化等によって様々な影響を受けてきた。本研究において1985年の結果と比べて生活実践において顕著な変化があったのは，以下の事柄である。

(1)「誕生日を祝う」,「（家族に朝の）挨拶をする」等，家族との関わりに関する項目の実施率は全体的に上がった。

(2) 家族，友人といった他者が服選びに関わる場面が減少し，「服を選ぶのは自分」という回答率が上がった。

(3) 手間のかからない簡単な生活実践の実施率は上昇し，調理も短時間化・省力化の傾向が見られた。

(4) 85年調査と同様に女子が多くの設問で実践率，正答率が高いものの，男女差は縮小傾向にある。

また，調理できる料理を見ると，家庭科を学習していない小学校４年生と学習している６年生とでは，「調理できる」の回答率が大きく異なること，家庭科で学習する料理について「できる」の回答率が上昇することから，家庭科での学習経験が影響しているものと推察される。よって，児童・生徒の生活実践力向上には，家庭科教育が何らかの寄与を果たしてきたといえる。

「取り扱い絵表示」の読み取りは，日常生活の中で観察し，実際に服の手入れをする際に活かされる知識だが，85年調査と比べて「わからない」という回答が増加したことは，今後の検討課題といえる。また，新たな生活家電の普及，多様な家事サービス等の「家事の社会化・外部化」が進展してきた。家庭科教育では授業の構想にあたり，これらの事象をどのように捉え，解釈していくか，児童・生徒の学習のレディネスをどのように見取るかについて改めて検討したい。

引用文献

1）福田公子．生活実践と家庭科教育．福田公子他編．生活実践と結ぶ家庭科教育の発展．大学教育出版，2004,pp.1-20

2）日本家庭科教育学会．現代の子どもたちは家庭生活で何ができるか．東京，家政教育社，1985，155ｐ.

3）日本家庭科教育学会東北地区会．これからの家庭生活技術．福島，大盛堂印刷所出版部，1986，155ｐ.

4）渡瀬典子，長澤由喜子．児童・生徒の居住空間選択における優先条件と住生活改善意識．岩手大学教育実践センター紀要，No.11，2012，pp.79-86

5）日本家庭科教育学会．児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科家庭科カリキュラムの構築.2003，pp.254-264

6）文部省．小学校指導書家庭編.1978，東京書籍,pp.35-70

7）文部省．中学校指導書技術・家庭編.1978，開隆堂,pp.92-116

8）文部省．高等学校学習指導要領解説家庭編.1979，実教出版,pp.22-26

9）前掲書３）